

潮音寺だより

第 254 号
平成 16 年 12 月
電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp

<ホームページ> <http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1-10-11



【出典】宝井其角の句

小島午郎 画

我が物と
思えば軽し

傘の雪

その
あなた

仕事
が
つらいと
思
つ
て
い
ま
せ
ん
か

その
か

その
学
生
さ
ん

勉
強
を

い
や
い
や
や
つ
て
い
ま
せ
ん
か

嫌
な
こ
と
苦
しい
こ
と

全
部

自
分
の
身
に
な
る
と
思
え
ば

な
ん
の
か
る
い
、
か
る
い

恐い名前の代書屋さん

今年も残り少なくなってきました。振り返ってみますと、まさに災害の年でありました。日本を縦断するような台風がいくつも上陸し、各地に史上まれに見るような甚大な被害をもたらしましたし、震度七というとてもない地震が、新潟中越地方を襲い、今も罹災された方々が、たくさん苦しんでおられます。

このような災害は、被災者を、悲嘆・憤り・失意・絶望といった、どうしようもなく辛い状況に追い込み、本当にあつて欲しくないことなのですが、時として、私も一筋の希望の光と、感動のドラマを与えてくれることもあります。この度の地震による土砂崩れで、母子が重く生き埋めになり、

奇跡的に、二才の男の子が、余震の続く危険な状況の中で、勇氣あるレスキュー隊によって救出されたことは、まさに、そのような感動を、我々にも分けていただけました。長く語り継いでいかれるのではないのでしょうか。

次に紹介するのは、そんな感動の物語です。

.....

それは木枯らしが吹く、大正十二年の暮れ近くのことでした。その年の九月一日、関東大震災が起これ、東京は半分以上が焼野原の廢墟となっていました。

この大震災で家族を失ってしまった獅子谷虎象さんは、上野のバラック長屋で代書屋さんを開いていたのです。代書屋さんというのは、役所や裁判所等の届け書

や、字の書けない人たちのために、手紙や葉書を代わって書いてあげる仕事をする人です。

ところが、虎象さんは、その一風恐い名前のせいでしょうか、サッパリお客がありませんでした。「場所が悪いのかなあ」などと思索しているところへ、一人の男の子が飛びこんで来たのです。

「おじちゃん、手紙書いてくれろ?」

そう頼む少年に、小さくてもお客さんは、お客さんだと思つた虎象さんは、

「いよいよどこへ出すんだい?」と尋ねました。

「インドのおしゃかさま。」

これを聞いた虎象さん、びっぴりして、

「大人を馬鹿にする気か!」

と怒鳴ろつとしましたが、あまりにその幼な子の目が真剣なの、「思わず言葉を呑み込んでしまいました。」

「ほへ、おしゃかさまに、お母ちゃんの目をさましてもらつたように頼みたいんだ。そして、「飯を作ってくれるよう」にお願いするんだ。」

「これはただ事ではないと思つた虎象さん、男の子に事情を聞くとお母ちゃんはすつと寝たきりだったけど、今朝になつて、いへら呼んでも目をさましてくれなれないのこつと、お腹もへこへこになり、誰かに頼もつと思つたら、ふとお釈迦さまのことを思い出したと言つのです。」

「だつてお母ちゃんが、いつも『困つた時には、おしゃかさまにお

願いしなさい』つて言つたもの。でも、地震でボクン家のお仏壇も焼けてなくなつてしまつたでしょう。だから、おしゃかさまに手紙を書いてもらいたいんだ。」

すべてを察した虎象さんは、少年を抱きしめると、

「分かつたよ、坊や。おじちゃんがお母ちゃんが目をさますように、坊やが温かいご飯がたべられるようにつてね。」

と約束したのです。

そして、この約束は本当になりました。虎象さんは、男の子の家に行つて、亡くなつたお母さんのお葬式を出してやり、少年を自分の子として引き取つたからです。

虎象さんは少年に言いました。

「お釈迦さまがすぐ返事をくだ

さつてね。お母ちゃんは体が弱いから、お浄土でゆつくりと休ませてあげるつて。その間、坊やは、おじさんの家で元気で待つていなさいつて。分かつたかい？」

「ビックリうなづく少年を見て、虎象さんもお釈迦さまに、

「私もこれで、生きる希望がわきました。」

と心からお礼を言つたそつです。

.....

同じ人間として生まれながら、弱みにつけ込んで、被災者からお金を巻き上げようと、オレオレ詐欺をはたらくような卑劣な人間もおれば、慈愛に満ちた心の持ち主の人も、実際います。

私ども、少なぐとも、そのような美しい心に、感動できる人間でありたいものです。

慈悲


キリスト教が「愛」の宗教であるのに対し、仏教は「慈悲」の宗教であるといわれま
す。「仏心とは、大慈悲これなり」といわれ、
仏道を学ぶ者の根本精神とされています。

この「慈悲」とは、サンスクリット語で直実の友情をあらわすマイトリー(慈)と、あわれみ、同情を意味するカルナー(悲)の合成語で、中国や日本では一語として使われています。仏さまや菩薩さまが衆生をいつくしみ、あわれむ心のこじです。
「慈」は、いつくしみ、人に樂を与えよと望む心、いわゆる樂の意味。
「悲」とは、人の苦しみを除こう

とする心、いわゆる拔苦の意味です。慈悲の愛、それはあたかも母親が自分の生命をかえりみずに、

住職通信

人間の幸福と
仏の供養
いつでもどこでも
合掌して
南無阿弥陀仏と
耳を通して心で聞く



わが子を愛する無我に徹した姿です。世の中の人、あらゆるものをいつくしみ、身をもってその苦し

みに代わろうとする、大いなる心の実践こそ仏の道にほかならないのです。(心ざんや『仏教の百科』)

▼表紙



庫裏新築の記念にと、檀家の小島午郎さまより、自筆の油絵を一点、頂戴いたしました。一点につきましては、紅葉の映える

寺院を描いた作品で、昨年の本誌十一月号にて紹介させていただきました。今回は、残る一点で、冬山と雪道に残る轍から、とも言われぬ深まりを感じ、とても素晴らしい作品であります。

▼在家勤行式

お経を覚えたいという方に、録音したものをお配りしようかと考えています。ただ、素人が作るものなので、出来映えには、少々疑問符がつきますが、CDでも使えるようにしたいと思っています。
一枚一枚自分で作りますので、一度に多くの方に、というわけにはいきませんが、ご希望の方は、お申し出下さい。

では、皆さまよいお年を……。
▼焼き茅や串やはらかに

とほりたる 沐魚